

セッション4

ミニストリーの性質

社会の中で信仰によって生きる

フィリス・クロスビー著

目的

仕事とミニストリーについて見ると、聖書全体を通してこの二つを結び合わせる一貫した糸があることに気づきます。「文化命令」は、人間に与えられた最初の職務規定であると言われてきました。また、その命令が大宣教命令と並行していることも、仕事とミニストリーとの結びつきを示しています。どちらも、神の御国の拡大の姿なのです。

この論文は、自分の職業を通して御国のために働くとはどういうことかを理解することを助け、ミニストリーに対する見方を広げ、ミニストリーが日常生活においてどのように当てはまるものであるかを示すためのものです。

目次

はじめに

第1章 神の御国とは何か

第2章 ミニストリーとは何か、だれが召されているのか

第3章 構造と方向性

第4章 贖いの行いを通して御国をもたらす

結論

はじめに

「私は信じられないくらいに忙しいのに、ミニストリーまでしろと言うのですか？」

あなたもこれまでに、このような思いを抱いたり、質問したりしたことがあるかもしれません。職業人として、ものすごく長い時間を職場で過ごし、その他のことに関わる時間がほとんどない、という状況かもしれません。このような感情は、私たちの世界観がどれほど分裂してしまっているかを示しています。ミニストリーとは、職場や余暇などの日常生活とは全く関係のないものであり、すでに忙しい生活の中にさらにつけ加えて行すべきものであると見られています。

クリスチャンに与えられている召命についての総合的な見方は、仕事とミニストリーの間の溝を埋めることを助けてくれます。オース・ギネスは「召命(The Call)」の中で次のように述べています。「だれもが、どこにおいても、何をやるにしても、ただ神のために考え、語り、生き、行動するべきである。」¹ 私たちの生活を一貫性のある統合されたものとすることによって、ミニストリーをやるとはどういうことかを理解しようとする上で、私たちに自由を与えてくれます。すでに忙しい生活に何かをつけ加えるのではありません。しかし、私たちは何をやるにしても、イエス様を知らなかった場合とは全く異なった仕方で行います。つまり、私たちの生活は、別々にバランスを取り、管理すべきもの(例えば仕事とミニストリー)をいくつか集めたものではなく、私たちのすべての行いが、仕事においても余暇においても、礼拝とミニストリーになるようにしてくださる神に対しての統合された長期間に及ぶ応答なのです。

これが継ぎ目のない生活のあり方なのです。つまり、大きな方向転換によって与えられた「新しいいのち」を、仕事、余暇、愛など、あらゆる領域において生きることです。イエス様が方向転換をもたらしてくださいました。そしてイエス様に応答することによって、私たちの生活のすべては、讚美歌を歌うにしても、歯を磨くにしても、礼拝となるのです。この新しいいのちを生きることによって、私たちは主の優先事項、主の愛、主の仕事、主のいのちをいただくのです。これこそが、主が意図されたいのちなのです。仕事であれ、余暇であれ、私たちのするすべてのことは主によって、主のためになされるのです。

この論文では、「創造」、「墮落」、「贖い」、「回復」という枠組みを通して神の御国とは何であるかを見ていき、神がこの世においてしておられることを明確にしていきます。また、神がしておられることに参加することの意味を定義するために、人間に与えられた最初の職務規定、大宣教命令、ヘブル語の「アヴォダ(avodah)」という三つの聖書的な概念について見ていきます。そして、これを日常生活においてどのように実践すればよいかについて結論づけていきます。

第1章 神の御国とは何か

神の御国は、他の王国の領域と同じように、王であられる神の支配が有効であるすべての領域を含みます。聖書は神の支配はすべての被造物に及ぶと述べていますが、神の御国が成長し、拡大しているとも述べています(マタイ 13章参照)。神の御国が宇宙大のものであり、すべての被造物を含むものであるのに、なおも成長しているとは、どういうことでしょうか。この問いは、「創造」、「墮落」、「贖い」、「回復」という、歴史の中心的なドラマの中に描かれている四章の福音へと、私たちを導いてくれます。

創造: 神の御国の範囲は、神の創造のみわざの範囲と並ぶものです。神ご自身以外に「存在する」すべてのものは、神によって「造られ」、神の創造のみわざの一部をなしています。神はすべてのものを造られ、すべてのものを支配され、すべてのものは喜んで神に従属しています。ですから、神の御国の範囲は宇宙全体に及びます。

墮落: 人間は罪を犯すことを選び、そのために被造物は墮落してしまいました。神はなおも、物理的なものも物理的でないものも含め、すべての被造物の主であられます。しかし、本来神が支配すべきものの一部が神の支配に対して反逆しています。神の御国は量的には変わっていません(なおも神の支配の範囲は宇宙全体に及びます)が、質的には変わってしまいました(今は墮落してしまっています)。もし神の被造物に入り込んだ罪がそれほど悪いものでなかったとしたら、罪は異なった結果をもたらしたことでしょう。しかし私たちの不従順のゆえに、サタンは神の御国に対して、不当な、しかし現実的な反逆を企てることのできるようになってしまいました。

アルバート・ウォルターズは「Creation Regained (再び獲得された創造)」の中で、罪と贖いが過激にも、全被造物にもたらされたことを次のように描いています。「サタンとキリストの主張には、どちらにも全体主義的なものがある。すべての被造物の中で、この二つの偉大な勢力の間に起きている争いに巻き込まれずに中立を保つことができるものは一つもない。」² ですから、神の御国の範囲は宇宙全体に及びますが、それは反逆を受けており、すべての被造物において、人々や組織(構造)は、もはや本来意図されたようには機能していません。

贖い: 良い知らせがあります。それは、イエス・キリストの贖いの血潮によってもたらされる贖いも、その範囲が宇宙全体に及ぶということです。被造物の中で神の支配が及ばないものや、ご自分のものとして贖うためにキリストが死なれなかったものは、一つとして存在しません。王であられるキリストによって、神の御国、あるいはキリストによる統治は、この世に救いによる支配をもたらすものとして理解されます。つまり、キリストがこの世にいやしと回復をもたらすために、ご自身の王としての権利を主張されているのです。神がご自身の御手のわざを捨て去られたことも、これから捨てることも、ありません。神の御国は旧約聖書においても生きて働いていましたが、今はイエス様にあって、新しい仕方存在しています。この世は自分のものであるというサタンの主張は、十字架上で全く砕かれてしまいました。

このことは、私たちが感じている「すでに」と「まだ」という二つの緊張について、はっきりと説明してくれます。ルカ 17:20-21 で、イエス様はパリサイ人たちに神の御国が来ることについて説明しています。「*神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。『そら、ここにある』とか、『あそこにある』と言えるようなものではありません。いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。』*

神の御国はイエス・キリストにあって、ここに、私たちのただ中にあります。しかし後にイエス様は弟子たちに対して、神の御国が来るように祈りなさいと教えられました(マタイ 6:9-13 にある、主の祈りを参照)。これらの箇所を読むと、御国は「すでに」ここに存在しますが、「まだ」ここに存在していないという側面もあることに気づきます。

ウォルターはこう説明します。「(神の御国の)『すでに』と『まだ』の側面は、キリストの初臨と再臨の間の期間のことを特徴づける。イエス様の初臨は被造物における足場を築いたが、再臨はイエス様の支配の完全な勝利を達成させる。その間、イエス様のしもべたちはイエス様の支配をあらゆるところでほめたたえるように召されている。それは、すでに『天においても、地においてもいっさいの権威』が確かにイエス様に与えられているからである。... イエス様は昇

天のときから神の御国をもたらし続けておられるが、今は、聖霊によって力を受けたイエス様の弟子たちの働きという方法を通してされているのである。」³ お分かりでしょうか？イエス様は弟子たちの働きを通して神の御国をもたらし続けておられ、私たちはイエス様の支配をあらゆるところでほめたたえるように召されているのです。

回復: 神の御国の「すでに」と「まだ」という側面は、このストーリーがまだ完了しているのではなく、最後の章が必要であることを示しています。「贖いの章」は、王がいやしと裁きを通して、失われたすべてのものを贖い、この世を正しく導くために、被造物において働かれたというストーリーを示します。そして、最後の章では、王がついに永遠に王座に着かれ、すべての罪と反逆を取り除き、すべての被造物を完全に支配されます。

贖いの過程は、墮落の後、すぐに始まりました。勝利は十字架上で得られましたが、すべての被造物はさらなるものを待ち望んでいます。ローマ 8:19-23 にこう書かれています。「被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現れを待ち望んでいるのです。それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。」

被造物は、墮落による奴隷状態から解放される必要があるため、切実な思いで待ち望んでいると記されています。イエス様がこの地上に来られたとき、この世はこのような状態でした。ウォルターズはイエス様がこの世に来られたときのことを次のように美しく描いています。「イエス・キリストによって、私たちは、長い間待ち望んできた、この世における神の王権の証拠と効果的な支配を目撃した。... 正当な王がご自身の領域において拠点を築かれ、ご自分に従うものたちに、すべての被造物における神の支配を拡大し続けるように命じられたのである。」⁴ 私たちは、キリストの王権が完全に回復され、すべての被造物が「墮落による奴隷状態から解放される」最後の日まで、贖いをもたらすために働き、ミニストリーをすべきなのです。

「贖いについての限定的な見方」は、仕事とミニストリーとの断絶を示すものです。贖いについて語る時、私たちはたいがい、個人のたましいの贖いのことだけを考え、その他の被造物の贖いについては見過ごしてしまいます。贖いについてのこのような見方は、イエス様の十字架の死の力と価値とを限定させ、部分的な敗北を認めてしまいます。サタンは最終的には滅ぼされるかもしれないが、キリストの十字架のみわざが墮落によって虚無に服したすべてのものを回復することができないとするなら、サタンは部分的な勝利を得たこととなります。さらに、神の御国をこの世にいやしと回復をもたらすためにキリストの王権がもたらされたことであると定義するなら、贖いを人間のたましいにのみ限定することは、神の御国の範囲を限定することとなります。物理的な被造物の価値を下げることは、あなたの職業や仕事の価値をも下げることとなります。もし被造物が限定された価値しかない、あるいは全く価値のないものであるなら、あなたの仕事もそのようなものとなってしまいます。

ウォルターズは次のように説明しています。「墮落やキリストによる解放はすべての被造物には及ばないとするとは、墮落というものが持つ過激な性質と、宇宙全体に及ぶ贖いの範囲に関する聖書の教えを妥協することである。」

使徒パウロはこのことについて、コロサイ1:13-20でより明確に説明しています。「神は、私たちが暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。この御子のうちにあつて、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ています。御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。なぜなら、万物は御子にあつて造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあつて成り立っています。また、御子はそのからだである教会のかしらす。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、御子のために和解させてくださったからです。…」

イエス様はご自身の弟子たちを通して、神の御国をもたらし続けておられます。イエス様は全宇宙の、見えるもの、また見えないものの王であられ、また創造主であられます。イエス様を通して、すべてのものが神と和解しているのです。

第1章のまとめ:

- 神の御国は、神の支配が有効であるすべての領域を含む。
- イエス・キリストは物理的なものと、物理的でないものの両方を含むすべての被造物に対する正当な支配を主張されている。
- イエス様の犠牲的な死は、個人的な贖いと全宇宙の贖いの両方をもたらす。
- 贖いの範囲を限定するならば、十字架でのキリストの死の力を限定することになる。

第2章 ミニストリーとは何か、だれが召されているのか

前の章では、イエス様は弟子たちを通して神の御国をもたらし続けておられ、イエス様を通して「万物」が神と和解していると述べました。イエス様はこの世に侵入し、いやしと裁きを通して、すべての被造物に対する王権を取り戻しておられます。

では、ミニストリーについての具体的な良い定義は「あらゆるところでイエス様の主権をほめたたえ、神の御国をもたらすこと」になるかもしれません。英語の聖書では、救いに関する言葉の大半は「re(再び)」という言葉に伴っています。そのうちのいくつかを挙げると、贖い(redemption)、和解(reconciliation)、回復(restoration)、刷新(renewal)、再創造(re-creation)、改革(reformation)、といった言葉です。これらの言葉はすべて、本来良い状態であったものを回復するという考え方に基づいています。これは、私たち個人と社会との両方において、様々な領域でキリストの王権が回復されるときに起こります。さらに、私たちも神のかたちに造られた者として神の創造のみわざに参加し、文化、技術、ビジネス、その他の領域において新しい発展を生み出すことで、この世に神の御国をもたらすことができます。

この章では、キリストの御国をもたらすとはどういうことかについて焦点を合わせるために、三つの聖書的な概念をレンズとして用いていきます。その三つの概念とは、ヘブル語の「アヴオダ(avodah)」という言葉、創世記1章に記されている人間に与えられた最初の職務規定、そして、大宣教命令です。

レンズその1:アヴォダ

「アヴォダ」とはヘブル語で含蓄の深い言葉で、この言葉から様々な英語の単語が派生しています。創世記では「アヴォダ」は「仕事」として記されています。また、この言葉は「礼拝」、「奉仕」、「ミニストリー」、「職人芸」をも意味します。例えば創世記 2:15にはこう書かれています。「神である主は人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。」ここに書かれている「耕す」という言葉はヘブル語では「アヴォダ」となっています。

アヴォダの意味:

職人芸(1歴代誌 28:21):ダビデ王はソロモンにこう命じました。「神の宮のあらゆる奉仕(アヴォダ)のために祭司とレビ人の各組がいる。あらゆる奉仕のために知恵のある、進んで事に当たるすべての人が、どんな仕事(英語訳では「職人芸」=アヴォダ)にも、あなたとともにいる。…」

仕事(出エジプト 34:21):モーセはこう言いました。「あなたは六日間は働き、…」

礼拝(出エジプト 3:12):そして神は言われました。「わたしはあなたとともにいる。…あなたがたは、この山で、神に仕え(英語訳では「礼拝し」)なければならない。」

奉仕やミニストリー(民数記 8章):主は、レビ人が主への奉仕をするようにとされました。

ヘブル語の聖書で「アヴォダ」という言葉がどのように用いられているかを見ると、仕事とミニストリー(神と人に対する奉仕)が、本来、どれほど似たものとして受け止められていたか洞察を得ることができます。一つの言葉が両方を表していたのです。つまり、ミニストリーとして神のためになされることと、職業を通して神のためになされることとの間の二元論はなかったのです。どちらも「アヴォダ」だったのです。

レンズその2とその3:最初の職務規定と大宣教命令

仕事とミニストリーについて見るとき、文化命令と大宣教命令とを結び合わせる一貫した糸が聖書全体に貫かれています。文化命令は、人間に対する最初の職務規定と呼ばれ、それを大宣教命令とともに見るとき、仕事とミニストリーの関係を知ることができます。どちらも、キリストの御国をもたらすための実行可能な方法です。

創世記 1:28 に記されている命令について考えましょう。それは神が私たちに対して本来意図しておられた姿を示すものです。「神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。『生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。』」

人類には神の支配のもとにこの世を発展させていく責任が与えられました。それによって被造物が神を反映し、神の栄光を現し、私たちが神と、神が造られた宇宙とを喜ぶためでした。その目的を果たすための方法は、ふさわしい仕方から従える、あるいは支配することでした。ウィクリフ聖書注解(Wycliffe Bible Commentary)は人類のことを次のように述べています。「信じられないほどの特権と、重い責任がゆだねられた、神に対する責任を負う管理者たち！」

墮落の後、この世は発展し続けましたが、罪のゆえに、腐敗した社会的、文化的な構造に沿って発展し続けてしまいました。物理的な宇宙でさえ、墮落してしまいました。しかし、「従え、支配せよ」という命令は破棄されたわけではありません。今、私たちは被造物を発展し続けること(文化命令、創世記 1:28)だけでなく、被造物を神の正当な支配へと

回復させる過程にも携わるように召されています(大宣教命令、マタイ 28:18)。ですから、被造物の発展と、被造物の回復の両方が、ミニストリー、あるいは神の御国をもたらすことの方法であるということは正しいのです。

文化命令に根づいた大宣教命令は、単に伝道するということをはるかに越えたものであるように思えます。実際、大宣教命令には伝道することが示唆されていますが、直接的に語られているわけではありません。私たちは単に回心者を生み出すのではなく、人々を弟子とするように召されています。回心した人たちがイエス・キリストの弟子となり、イエス様が教えられたすべてのことを守るまで、私たちの働きは完了しません。人々が神の御国の市民として効果的に用いられ、彼ら自身がイエス様の御国をもたらすようになったときに、私たちの目的は達せられたこととなります。キリストの弟子となった人たちにイエス様が命じられた「すべてのこと」を守るように教えるとき、私たちは文化命令という最初の職務規定に自然と立ち返ることになるのです。

この二つの箇所を比較することによって、神の御国をもたらすことの意味をより明確に知ることができます。アルバート・ウォルターズは「Creation Regained(再び獲得された創造)」でこのように述べています。「被造物に対する神の支配は、人間の責任という仲介を通してなされる。」⁶ 私たちの支配はこの世における神の支配を反映するものですが、神はご自身の支配、あるいは御国を拡大するために、私たちを用いられるのです。

大宣教命令は、創世記に記されている最初の職務規定にとってもよく似たものです。神の支配は絶えず存在し、創世記においても神の御国は存在しました。今日、墮落と贖いの過程がこの世において起きているので、神の御国には「すでに」という側面と、「まだ」という側面があります。罪が敗北する中、神の御国が打ち立てられています。「**従え、支配せよ**」という私たちの職務規定は、贖いの働きを含むものとして拡大されています。つまり、私たちは神の創造の計画にしたがって、この世を発展させ続けるべきであるとともに、被造物の腐敗した側面を本来意図された姿に、また神の支配に戻すことによって「罪を打ち負かしている」のです。

このような「発展」と「回復」の働きは、私たちの支配が及んでいる領域においてなされます。私たちが支配しているものを神の支配にもたらすときに、私たちは正しい仕方で支配することになります。そうすることによって、私たちは神の王権を拡大し、様々な領域で神の御国をもたらします。

では、私たちは何を支配しているのでしょうか。この世のどこで支配しているのでしょうか。最も小さな領域であっても、私たちは自分自身をコントロールしています。しかし、社会の市民クラブや地域社会との関わりを通して、職場や家庭についても私たちのコントロールが及んでいることが多いでしょう。支配ということを超えて、私たちは影響を与えています。影響力も支配の一部であり、それも神の御国の拡大と回復のために用いられるべきものです。

私たちが支配している領域におけるイエス・キリストの主権を強調することは大切です。A.W.トウザーは「The Pursuit of Man(人の追及するもの)」でこう述べています。「私たちは主権という失われた概念を、教理としてだけでなく、まじめな宗教的な感情の源として取り戻す必要がある。私たちがこの世を支配するための見えない笏を、私たちの死ぬべき手から取り戻す必要があるのだ。」⁷ この世は究極的には神のものであり、神が支配しておられることを、忘れてはなりません。私たちは神の支配のもとで支配する者たちです。私たちの支配する領域においても、私たちはなおも神に従属する者たちなのです。

文化命令と大宣教命令を比較してみましょう。

創世記 1:26-28

そして神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をばうすべてのものを支配させよう。」と仰せられた。神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をばうすべての生き物を支配せよ。」

「神は...仰せられた。」

神が語られる

「われわれ」

神の名は「エロヒム」: 王権を持った複数の存在

三位一体の神が示唆されている

「神は...仰せられた。」

「エロヒム」とは「初めも終わりもなく、支配すること」

「初めに、神が天と地を創造した。」(創世記 1:1)

創造主である神は、すべての被造物に対する権威を持っておられる。

「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。...」神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。...」

人間は、何を「する」ように召されているか「知っている」(道徳的責任)ので、特別な存在である。

「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をばうすべての生き物を支配せよ。」

再生産とすべての被造物を支配することが命じられている

「われわれのかたちに、人を造ろう。...」

人類は三位一体の神と一つとなるようにされている

マタイ 28:18-20

イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とせよ。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」

「イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。...」

イエス様(神)が語られる

「父、子、聖霊」

三位一体の神がはっきりと表されている

「...見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」

初めもなく終わりもない、主権者なる神

「天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。」

イエス様はすべての被造物に対する権威を持っておられる。

「わたしがあなたがたに命じておいた(知らせておいた)すべてのことを守る(行う)ように、彼らを教えなさい。」

人間は、何を「する」ように召されているか「知っている」(道徳的責任)ので、特別な存在である。

「... あらゆる国の人々を弟子とせよ。」

再生産とすべての被造物を支配することが命じられている

「父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、...」

人類は三位一体の神と一つとなるようにされている

では、ここまでを振り返って、ミニストリーについて明確に理解できているか確認しましょう。まず、「アヴオダ」という言葉について見ました。この言葉は「ミニストリー」、「奉仕」、「礼拝」、「仕事」などと訳すことができ、私たちの生活は二元論的ではなく、神への一貫した応答であるべきことをほのめかしています。また創世記に見られる文化命令と、マタイの福音書に見られる大宣教命令の関係についても見ました。この二つの箇所は、私たちがキリストの王権のために被造物を発展させ、回復させるべきことを示しています。では、ミニストリーの意味についてよりはっきりと理解するために、これら三つの聖書的なレンズはどのように役立つのでしょうか。

仕事を通して神の御国をもたらす：私たちの「アヴオダ」を通して、被造物を発展させ、回復させることができるということは正しいです。この意味において「アヴオダ」は仕事とも、ミニストリーとも訳すことができます。なぜでしょうか。墮落する以前、人類は被造物を発展させることに責任を負っていました。そして、キリストが来られてから、私たちの職務規定に回復の要素が加わりました。ですから、今、私たちは仕事を通して神の計画にしたがってこの世を発展させるだけでなく、墮落によって腐敗したこの世のある部分(そして人々)を回復させてもいるのです。ですから、私たちは職場において、神の御国の原則に沿って仕事を発展させていくか、あるいは同じ原則によって仕事を回復させるかによって、神の御国をもたらすことができるのです。

伝道と礼拝を通して神の御国をもたらす：詩篇において、礼拝と宣べ伝えること(ミニストリーの一つの現れ)は、はっきりと結びついています。どちらも神のご性質とみわざに注目させ、それを現すものであり、神の栄光を現します。詩篇 145:1-4 に記されている礼拝の言葉は、4 節でクライマックスを迎えます。「代は代へと、あなたのみわざをほめ歌い、あなたの大能のわざを告げ知らせるでしょう。」また、次世代に主の道を教えることについて書かれている詩篇 78 篇を見てください。4 節にはこう書かれています。「それ[神についてのこと]を私たちは彼らの子孫に隠さず、後の時代に語り上げよう。主への賛美と御力と、主の行なわれた奇しいわざとを。」神のなされたことを教えたり、宣べ伝えたり(伝道)するとき、私たちは神を礼拝します。神に栄光を帰するとき、私たちは神を現します。伝道も礼拝も「アヴオダ」であり、どちらも神の御国をもたらします。

奉仕を通して神の御国をもたらす：ミニストリーや礼拝は単なる言葉ではありません。それは奉仕です。このことについて、イエス様が私たちの模範です。「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。」⁸ 私たちは、聖書を通じて、イエス様の模範に従うように命じられています。次の箇所について考えてみましょう。ガラテヤ 6:10「ですから、私たちは、機会のあるたびに、すべての人に対して、特に信仰の家族の人たちに善を行ないましょう。」ヘブル 10:25「ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。」¹ ペテロ 4:10「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。」⁹ 「神の恵みを管理する」という概念は、文化命令を思い起こさせてくれます。私たちはそうすることによって「この地上における神に対して責任を負う管理者」として責任を果たすことになるからです。「アヴオダ」は奉仕と伝道の両方であり、どちらも神の御国をもたらす方法なのです。

世間の目にさらされることを通して神の御国をもたらす：マタイ 5:14-16 には、私たちは世界の光であると書かれています。光は礼拝と伝道の両方を含む概念を現し、輝かせます。「あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。また、あかりをつけて、それを柀の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家

にいる人々全部を照らします。このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」私たちの良い行い、あるいは奉仕、また本質的には態度が、人々の神に対する理解とどのように結びついているか、注目してください。この箇所では、奉仕、礼拝(神を現すこと)、伝道(これも神を現すこと)はすべて関係しています。

私たちの「礼拝」、「仕事」、「奉仕」、「ミニストリー」は、みな、神に対する継ぎ目のない応答の一部なのです。「アヴォダ」は文化命令と大宣教命令の両方に対する従順を通してふさわしく表現される、内側で互いにつながっている行いなのです。それは、キリストの弟子たちが、この世においてさらにキリストの王権をもたらすようにさせます。



私たちの生活は「アヴォダ」によって整えられ、「アヴォダ」によって満たされています。「アヴォダ」は私たちの信仰を世の人々に示す枠組みとなり、私たちのあり方と行いとを、また内側の聖さと人前での行いとを、いつまでも結び合わせミニストリーてくれます。

「アヴォダ」、文化命令、大宣教命令という三つのレンズの焦点を合わせることによって、ミニストリーとは私たちの周りの世に神を現すことであり、被造物(被造物である人々と、被造物そのものの両方)を発展させ、回復させることを通して神の御国をもたらすことであるということが分かってきます。

ミニストリーとは、仕事、礼拝、奉仕と同じように、私たちの新しいいのちにおいて自然な、また必要な要素です。神の御国に属する市民はみな、「普通のクリスチャン生活」の一部として、ミニストリーをする責任を担い、行うことができます。

ここまで、ミニストリーとは神を現し、神の御国をもたらすことであり、神の計画に従って被造物を発展させるか、神の意図された状態に回復させるかによって、神の御国の拡大に貢献する、ということを見てきました。このことは、人類に対するミニストリーのみに限ったことではありませんが、そのことをも含みます。伝道は贖いの行いとして、とても重要なものです。

第2章 ミニストリーとは何か まとめ:

- 「アヴォダ」、文化命令、大宣教命令は、ミニストリーとは何かという定義づけをするのに役立つ。
- ミニストリーとは「あらゆるところでキリストの主権をほめたたえ、神の御国をもたらすこと」である。
- 「アヴォダ」は私たちの信仰を世の人々に示す枠組みとなる。
- ミニストリーは、私たちの新しいいのちにおいて自然な、また必要な要素である。

第3章 構造と方向性

ミニストリーの性質、言い換えるなら、神の御国をもたらすことについて、さらによく理解するために、**構造と方向性**という概念についても考える必要があります。

構造とは、被造物における物理的でない側面であり、それは被造物に内在し、本来良いものとして存在するものです。構造はどのようなものにも存在する創造的な組織です。物理的な世界と、物理的ではない、社会的、あるいは文化的な構造とが存在します。どちらも被造物の一部です。

創造的な構造には、結婚生活と家族、ビジネス、政府、地域社会などがあります。被造物における非物理的な構造は、人間の構造と比較することができます。物理的な地球や星と同じように、人間にも物理的なからだがあります。しかし、思考、感情、意志といった物理的でない側面も持っています。

方向性とは、ある構造に作用する罪の引力と贖いの引力について示すものです。どのような構造も、神に向かって、あるいは神から離れる方向に向かっていくことができます。

21世紀の現実の世界を見るとき、それが良いものと悪いものから成り立っていることに気づきます。このことと「御国のストーリー」とはどのように関わっているのでしょうか。宇宙のすべてのものが創造のときから同じ状態を保っているなら、すべての造られたものは良かったと宣言されているので、この世は完全に良いものであると期待することができます。それに対して、この世全体に影響をもたらしている墮落のゆえに、すべての被造物が腐敗しているなら、この世は完全に悪いものであると考えるしかありません。しかし、それは私たちの経験と合致しません。日常生活において、私たちは良いものも悪いものもあることに気づきます。それは、墮落と贖いの両方がこの世において作用しているからです。

「構造」と「方向性」は、「原状、現状、可能性、将来」という枠組みを通して考えるなら、私たちの生きるこの世にある「良いもの」や「悪いもの」をふるいにかけて、生活の様々な領域でどのように関わるべきかを知ることができるように助けてくれます。

「原状」: 神が創造され、それは良いものでした。これは物理的な世界にも、また物理的な世界のために神が造られた文化的、あるいは制度的な構造にも当てはまります。ですから、構造とは本来良いものであり、私たちのストーリーの「原状」の章を表します。

「現状」: 墮落のゆえに、すべての被造物が部分的に腐敗しました。それは物理的な世界とそうでないものの両方を含む、あらゆる創造的な構造を含みます。神の創造は本来良いものでしたが、今は崩され、腐敗しています。

「可能性」: もし墮落がストーリーの終わりであるなら、この世における腐敗はやむことがないので、私たちの生活における「悪いもの」についてしか説明が付きません。贖いによって、崩された構造は再び築き上げられ、神が意図されたものへと戻されていきます。ですから、墮落と贖いの章においてこそ、創造された「構造」がどの「方向」へと進んでいく

かが決まるのです。「構造」は意図された創造の姿を示すのに対し、「方向性」は構造に対する墮落と贖いの効果を示します。

「将来」:最終的にはすべての被造物は回復され、どのような構造も神に向かって進んでいくので、方向性は問題となりません。そのとき、すべての構造は完全に贖われ、回復されます。

例えば、セックスや政府という創造された構造は良いものです。しかしそのような構造の方向性は、墮落がもたらす、より腐敗した方向に進むかもしれませんし、キリストの十字架の死がもたらす贖いの方向に進むかもしれません。

愛し合う結婚生活において、喜びと親密さを得る目的でなされるセックスは良いものであり、その構造において神が意図された性質を反映します。ビジネスも被造物の一部であり、本来意図された構造を持っています。しかし、売春はセックスとビジネスの両方の構造において腐敗したものです。売春は腐敗した「方向性」を持ち、セックスとビジネスについて、神が意図された状態から引き離すものです。

「神に対して責任を負う管理者」¹⁰として贖いの行い、つまり被造物を神が本来意図されたところに戻し、キリストの王権のもとにもたらすとき、私たちはミニストリーをすることになります。与えられた領域において神の御国をもたらすからです。それは、神の支配のもとに組織をもたらすことでも、人々をもたらすことでもあります。それは、贖いが社会的、文化的要素をもった物理的な宇宙？と、知性、感情、からだという構造をもった人間との両方の領域に関わるものだからです。

第3章 構造と方向性 まとめ:

- 神がすべての被造物を良いと宣言されたとき、それには物理的なものと非物理的なものの両方が含まれた。
- 構造とは文化と社会を治める被造物における非物理的な部分である。それは本来良いものである。
- 墮落のゆえに、非物理的なものを含むすべての被造物は腐敗してしまった。それゆえ、すべての構造も腐敗している。
- 方向性とは特定の構造が、墮落のゆえにより腐敗した方向に進むか、キリストの十字架の死によって神の方向に進むかを示すものである。

第4章 贖いの行いを通して神の御国をもたらす

もしミニストリーが「あらゆるところで神の主権をほめたたえ、神の御国をもたらすこと」であるなら、ミニストリーは日常生活においてどのような姿を取るのでしょうか。

構造と方向性は、贖いの行いについての枠組みをもたらします。人々、あるいは社会的な構造を、贖いの方向性へと導き、特定の領域においてキリストの王権を回復するなら、私たちは贖いの行いをしていることになります。それは個人の心やたましいにも、また非物理的な構造にも当てはまることです。

私たちが贖いの行いを実践し、神の御国をもたらすことができる、主要な四つのミニストリーがあります。効果的に奉仕するには、これらの側面が私たちの世界観において一貫性のあるものとなることが重要です。

・「宣べ伝えること」には、伝道、弟子育成、教えが含まれますが、それは私たちのメッセージに関することです。そのメッセージは、言葉と行いの両方において宣べ伝えられます(新しいいのちを生きること)。伝道と弟子育成の目標は、個人の生活において神の支配を拡大させることです。

・「社会的な奉仕」は、愛のゆえに人々を愛することです。それは、キリストが愛しておられる人たちの益のために、あるいは救いのために、私たちに与えられた新しいいのちを生きることによって表されます。この愛は、いつもではありませんが、しばしば、言葉を用いることを通して理解されたり、補われたりします。しかし、奉仕の目標は愛することであり、回心させることではありません。

・「文化的な関わり」は、様々な社会的な構造に対して社会がどのように理解し、応じているかについて整えることによって、文化の側面を創造主のみこころに沿ったものへと変えていくことです。それは、構造を回復させることと、発展させることの両方を含みます。腐敗した構造は、しばしばこの世に悲惨をもたらし、また、腐敗した方法に人々を縛りつける結果をもたらします。社会的な奉仕と文化的な関わりは、私たちの行動の目的や範囲の広さによって区別されます。奉仕の行いには貧しい人々に食事を提供することも含まれるかもしれませんが、文化的な関わりは、貧困を制限させるように努めることが含まれるかもしれません。

・「支配権の行使」は、職場、家庭、あるいは社会的な行動を通して、自分のコントロールにあるすべてのことを御国の価値観に従って整えることによって、神の御国をもたらすための方法です。

これらの四つのミニストリーは、互いに関わり合い、別々に分けることはできません。「御国の拡大」とは、すべての被造物において王であられるキリストを回復することである考えるなら、これらのどの要素も神の御国の拡大のために必要です。

ジョン・ストットは社会的な行動と伝道について次のように述べています。「それらはどちらにも属しているが、それぞれが独立している。どちらも他のことをするための方法ではなく、また他のものを現すものでもない。どちらもそれ自体が目的である。どちらも、偽りのない愛の表れである。」

ストットの言う「社会的な行動」は、「社会的な奉仕」と「文化的な関わり」の両方を含みます。これらは互いに関わり合い、また伝道とも関わり合います。大切なことは、私たちは御国の市民として、あらゆる点においてキリストを代表するということです。私たちはキリストのメッセージ(言葉と行い)を、キリストが語りたいと願っておられる人々に伝える必要があります。キリストが愛しておられる人々を愛する必要があります。さらに、私たちに支配権がゆだねられている領域において、被造物をキリストの支配のもとに戻す必要があります。

ストットは、社会的な行動と伝道の両方を、偽りのない愛の表れである、と述べました。ミニストリーのこれらの要素について、それらが「互いに属している」と彼が言ったのは、まさにその通りです。行動と言葉とが一致していないとき、

残されたものは、愛以下のものでもありません。

1コリント13:1-3について考えてみましょう。「たとい、私が人の異言や、御使いの異言で話しても、愛がないなら、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです。また、たとい私が預言の賜物を持っており、またあらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ、また、山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、何の値うちもありません。また、たとい私が持っている物の全部を貧しい人たちに分け与え、また私のからだを焼かれるために渡しても、愛がなければ、何の役にも立ちません。」

現代の教会の中において、近年、互いに相手の立場を批判し、溝ができてしまっています。ある教会は、目を外に向けています。彼らは「良い行いをする」ことに献身しています。彼らは社会的な変革のために働くことが大切であると考えています。良い行いをすることは、個人的な聖さへのすべての要求を満たすものであると考えます。

それに対して、内側の聖さ、あるいは「良い者であること」に集中している人たちもいます。彼らは社会的な変革を目指すグループに対して、福音を単なる社会正義というものに貶めてしまい、伝道と弟子育成の必要性を忘れていて、と非難しています。このグループは文化的な関わりを無視し、「良い行い」をすることなしに「良い者」にはなれない、ということをおぼえてしまっています。

社会的な事柄を取り上げることによって、伝道がおろそかになるという恐れは正当なものです。他の人は、伝道に力を入れることによって社会的な事柄を無視することになるという恐れを抱きます。これら両方の伝統の落とし穴を、どのようにすれば避けることができるでしょうか。まず、私たちは正しいことを恐れる必要があります。よりふさわしい恐れとは、聖書に忠実でなくなってしまうことへの恐れです。私たちは人々に対する思いと、社会に対する思いとのバランスを取ろうとしているわけではありません。神が人々と社会の両方を気に留めておられるので、私たちも両方を気に留めるのです。私たちは福音の真理全体を生きるように、自分たちの信仰を表していきたいのです。

人々を愛しながら、彼らが住んでいる世界を無視することはできません。私たちクリスチャンが責任を負わないなら、だれが責任を負うのでしょうか。私たちの救い主がこの世に対する主権を主張しておられるのです。ですから、「責任ある管理者」である私たちに、この世を神の支配のもとにもたらす責任が委ねられているのです。これこそ、偽りのない愛です。それに対して、神が愛しておられる私たちの隣人に対して、神について語ることなく、彼らを愛することはできるでしょうか。福音を宣べ伝えることも、偽りのない愛なのです。

第4章 贖いの行いを通して神の御国をもたらし まとめ:

- 宣べ伝えること、社会的奉仕、文化的な関わり、支配権の行使、という四つのミニストリーは互いに関わり合い、別々に分けることはできない。
- 御国のために語る私たちの言葉は、御国のために示す私たちの行動と結び合わされる必要がある。
- 私たちは御国の市民として、あらゆる点においてキリストを代表する。

結論

キリストと御国のために、あらゆる領域において全力を尽くして生きることは、私たちが影響を及ぼしている、あるいは支配しているすべてのものを、キリストの王権のもとに連れ戻すことです。これこそ「あらゆるところで神の主権をほめたたえ、神の御国をもたらすこと」なのです。もはや、仕事をミニストリーと切り離すことはできません。仕事はキリストのためになされるとき、ミニストリーなのです。また、ミニストリーは宣べ伝えることや、社会的奉仕や文化的な関わりと切り離すことはできません。それぞれは互いに所属し合っているのです。

私たちの道徳的な良心(神に対する私たちの責任)によって、この世における私たちの任務を伝える(あるいは整える)必要があります。神は愛と目的をもって私たちが造り、贖ってくださいました。神は私たちが「信じられないほどの特権と、重い責任がゆだねられた、神に対する責任を地上で負う管理者たち」として造られ、また再創造してくださいました。私たちが神に応答し、神の御国をもたらすための支配権と能力を与えてくださいました。

歴史上、最も偉大なクリスチャン変革者の一人である、ウィリアム・ウィルバーフォースは次のような人であったと言われています。「真の、永続的な変革は、人々の心と思いのうちに、一度につき一人ずつ起こるということを深く理解していた。それぞれの人が、それぞれの影響力においてやがて変革と刷新をもたらす器となっていく。彼らは、富裕者層、貧困層、中流階層といった社会のあらゆるところにおいて、与えられたあらゆる賜物と才能を用いて、同僚である市民たちと力を合わせ、良い社会を築くために自分たちの任務を最後まで行っていった。個人の心と思いのうちに起こる変革こそ、社会の基本となり、欠くことのできない道徳的な共通認識を生み出し、そのような任務をもたらしたのである。」

ミニストリーの性質

- 1 オース・ギネス, *The Call*,
- 2 アルバートM.ウォルターズ, *Creation Regained*, William B. Eerdmans, 1985, Grand Rapids, MI p 60.
- 3 *Creation Regained*, p 63
- 4 *Creation Regained*, p 61
- 5 *Creation Regained*, p 71
- 6 *Creation Regained*, p 81
- 7 A.W.トウザー, *The Pursuit of Man*, Christian Publications, Camp Hill, PA, 1978, p.41
- 8 マルコ10:45
- 9 The Wycliffe Bible Commentary
- 10 同上